

R025

韓国語の主題助詞 -eun/neun・主格助詞
-i/ga の談話機能の発達

—日本語の主題助詞ハ・主格助詞ガとの比較—

神田外語大学	田原俊司
和光大学人文学部	伊藤武彦
東京大学教育学研究科	朴媛淑

韓国語の主題助詞 -eun/neun・主格助詞 -i/ga の談話機能の発達

—日本語の主題助詞ハ・主格助詞ガとの比較—

神田外語大学 田原俊司
和光大学人文学部 伊藤武彦
東京大学教育学研究科 朴媛淑

Abstract

Both Japanese and Korean have a topic marker and a nominative marker. The Japanese topic marker “WA” and the nominative marker “GA” are used differently according to the discourse function. It is not confirmed whether the Korean topic marker “EUN/NEUN” and the nominative marker “I/GA” have the same discourse function as the Japanese equivalents. The purpose of this experimental study was to examine developmentally whether “EUN/NEUN” and “I/GA” are used differently depending on the discourse function. Speech samples were collected from native speakers of Korean. Seventy children ranging in age from 4 to 14 and ten adults made and told stories by looking at pictures in an elicited production task. Four to six-year-old subjects used only “I/GA” regardless of context. Eight and ten year olds began to use “EUN/NEUN” for the referent which appeared in the previous context, but not constantly. Subjects above twelve-year-old systematically differentiated “EUN/NEUN” and “I/GA” according to the discourse function. The data showed the distinction of the topic marker and the nominative marker in Korean is functionally equivalent to that in Japanese in terms of old and new information structure. The developmental similarity of the acquisition of distinctive usage of topic

vs. nominative markers between Korean and Japanese was also found.

Key Words: language development, Korean, grammar, discourse function, particles.

外国人日本語学習者がしばしば習得困難であると感じる文法項目に助詞ハとガの使い分けの問題がある。ところが、朝鮮語（以下韓国語と表記）を母語とする者は日本語の助詞ハとガの使い分けを容易に学習することが日本語教育者の中で一般に知られている。この違いを生み出す要因として、外国人日本語学習者の第1言語に日本語の文法装置に対応した文法装置があるかどうかが挙げられよう。すなわち、韓国語は基本語順がSOV（主語—目的語—動詞）で後置詞言語（名詞の後に助詞が付く）であるとともに、主題をあらわす助詞 *-eun/neun* と主格をあらわす助詞 *-i/ga* が存在し、日本語の主題助詞ハと主格助詞ガに対応した文法装置を持っているために、日本語の助詞ハとガの使い分けの習得が容易に行われると考えられる。Li and Thompson (1976) は、その言語が主題と主格の文法装置を持っているどうかで世界の言語を分類しているが、日本語と韓国語を主題と主格の両標識を併せ持つ言語として世界の言語の中で同じグループに位置づけている。韓国語の場合、主題助詞と主格助詞はそれぞれ異形態を持ち、助詞の直前の名詞が母音で終わるか子音で終わるかで使い分けられる。すなわち、名詞が子音で終われば主題の場合 *-eun*（ウンと発音）、主格では *-i*（イと発音）、名詞が母音で終われば主題の場合 *-neun*（ヌンと発音）、主格では *-ga*（ガと発音）が用いられる。例えば、*wonpok*（原爆）は子音 *k* で終わるので主題の場合 *-eun*、主格では *-i*、*hekmugi*（核兵器）は母音 *i* で終わるので主題の場合 *-neun*、主格の場合 *-ga* を後置させる。

構文論的にみると、韓国語においても *-eun/neun* には主題と対照、*-i/ga* には主格と総記（排他）それぞれの機能があり、日本語のハとガと共通する使い

分けがあることが指摘されている (洪, 1983; Tak, 1982)。一方, 日本語の助詞ハとガを, 文と文の関係, すなわち談話という観点からみると, ハは旧情報を, ガは新情報をあらわすことが指摘されている (久野, 1973)。田原・伊藤 (1985) は先行文脈に基づいて物語を伝達する課題において, ハ・ガは必ずしもそれぞれ先行文脈に有るか無いかで決まる既出・初出ということによって使い分けられていないことを明らかにし, ハ・ガは旧・新情報という心理的な判断により使い分けられていることを示唆した。田原・伊藤 (1985) の定義によれば, “初出一既出” とは「先行する発話の中に, これから言及しようとする事物があるか否かで, あった場合には既出, ない場合には初出」である。これに対して, “新・旧情報” とは「場面あるいは先行文脈などによって, これから言及しようとする事物が聞き手の意識にすでに導入されていると話し手に仮定されているか否かで, 話し手が導入されていると仮定していれば旧情報, 仮定していなければ新情報」である。韓国語の -eun/neun と -i/ga にこのような旧・新情報に基づく使い分けがあるかどうかについて実証的に確かめた研究は今のところなく, これを研究することは極めて意義深い。

Greenfield (1979), Bates & MacWhinney (1979), 天野 (1985) は, 様々な言語で 2 語文期にはすでに新旧情報に基づいて語順を決定する傾向があることを示している。また, 日本語の助詞ハとガ (大久保, 1967; 宮原・宮原, 1973, 1976; 前田, 1977) や韓国語の -eun/neun と -i/ga (趙, 1984; Clancy, 1986) は非常に早くから初出し, 1 歳の後半から 2 歳の頃にかけてであることが報告されている。日本語においては, ハとガがこれほど早期に出現し, この時期にはすでに語順に基づいて新旧情報を使い分け始める傾向があるにもかかわらず, 助詞ガとハを新旧情報に対応させて使い分け始めるのはずっと遅いということが明らかにされてきている (林部, 1983; 近藤, 1978; 田原・伊藤, 1985; 岩立・稲葉, 1987)。韓国語の -i/ga と -eun/neun に新旧情報に基づく使い分けがあるとすれば, 日本語と同様に韓国語においても, 新旧情報に基づく主格助

詞と主題助詞の使い分けが遅れるのかどうか調べるのは興味深い。

本研究は、韓国語において、新旧情報に基づく *-eun/neun* と *-i/ga* の使い分けがあるかどうか、もしあるとすればその使い分けのパターンは日本語のハとガと比較してどのような特徴を持つのか、さらに使い分けがいつ頃出現し獲得されるのかを明らかにすることを目的とする。このような知見は、韓国語の母語教育および日本人を含む外国人の韓国語教育の基礎資料になるのみならず、韓国語と日本語を比較することにより日本語教育へも貴重な示唆を与えるものとなる。

方 法

被験者：韓国語を母語とするソウル及びソウル近郊の 4, 5, 6, 8, 10, 12, 14 歳群、大人（大学生）の 8 群で、各群 10 名、計 80 名。実験は 1986 年 3 月にソウルで実施され、実験時の各群の平均年齢は、それぞれ 4 歳 9 ヶ月、5 歳 6 ヶ月、6 歳 8 ヶ月、8 歳 7 ヶ月、10 歳 9 ヶ月、12 歳 6 ヶ月、14 歳 7 ヶ月、20 歳 5 ヶ月であった。

実験材料：Fig. 1 に示す 4 枚の絵カード (a), (b), (c), (d) のように、(a), (b) ではそれぞれ異なる動物が個々に行為をし、(c) では (a), (b) のどちらか片方の動物が他方の動物に行為をし、(d) では (c) で行為を受けた動物が行為をするというように設定された 4 枚で 1 組の絵カードを 1 課題として 3 課題。具体的には、第 1 課題の絵カードには (a) にわとりがエサを食べている、(b) 犬が歩いている、(c) 犬がにわとりを追いかける、(d) にわとりが飛んで逃げる場面が、第 2 課題の絵カードには Fig. 1 に示されているように (a) 猫が歩いている、(b) ネズミが走っている、(c) 猫がネズミを追いかける、(d) ネズミが穴に逃げ込む場面が、第 3 課題の絵カードには (a) パンダが寝ている、(b) 猿が逆立ちしている、(c) 猿がパンダにかみつく、(d) パン

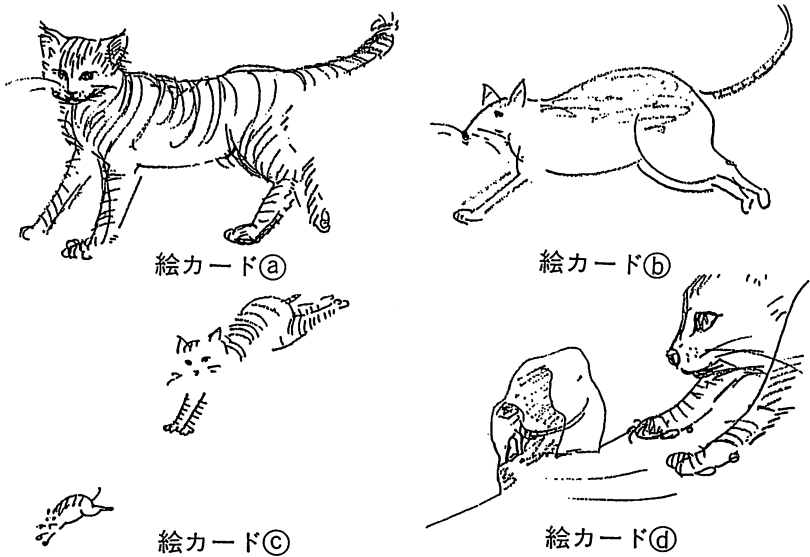


Fig. 1 実験で使用された絵カードの1例

ダが猿をなぐる場面が、それぞれ描かれている。その他の実験材料として、コアラの人形、おもちゃの電話機2台、ついたて、電線。

手続き：Fig. 2 に示す実験場面を設定し，“いまから4枚で1つの話になっている紙芝居を見せますので、ぬいぐるみの人形にその話を教えてあげてください。ただし、お話を教えてあげる最中は、ついたてをあなたと人形の間に立てますから、ぬいぐるみの人形は絵を見ることができなくなってしまいます。ですから、電話で話を教えてあげてください。それから、お話は私（実験者）の指さしたものから話しはじめ順番に作って教えてあげてください”という指示をする。実験者が被指示物を指さして30秒以上しても物語を作らない場合には“どうしているの”という発話を促す問いを与える。“……している”という返答で被指示物名が欠如している場合には“ぬいぐるみの人形は絵が見えないの

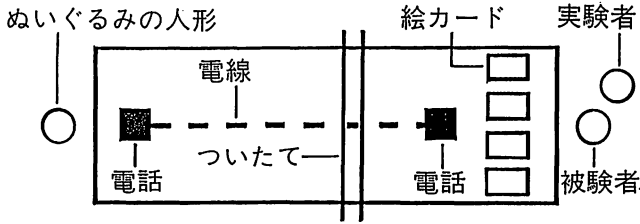


Fig. 2 実験場面

で、人形にわかるように教えてあげて”という教示を与え、被指示物名が表現されるまでこの教示を繰り返す。実験者の被指示物の指さしの順番は、(a)、(b)、(c)、(d)の順に行い、(a)、(b)ではそれぞれの動物を、(c)では行為の主体となる動物を、(d)では(c)で行為を受けた動物を指さす。なお、(b)に対する被験者の言及が終ったとき、実験者は(c)の被指示物を指さす前に、”(c)の行為主)が、(c)で行為を受ける動物)を見つけました”(実験では括弧に動物名が入る)というナレーションをいれる。このナレーションは、田原・伊藤(1985)が日本語においてハトガの談話機能を調査する際、(b)から(c)への移行をスムーズにするために用いたものであり、本実験でもこの方法に従った。なお、以上の教示・ナレーションは成人韓国語母語話者による自然な韓国語で行われ、主題助詞や主格助詞を強調することはなかった。以上の手続きで3課題を行った。

結果と考察

本研究の課題はすでに記述したように1つの課題が4枚1組の絵カードから構成され、被指示物の動物は1, 2枚目の絵カード((a), (b))では初出, 3,

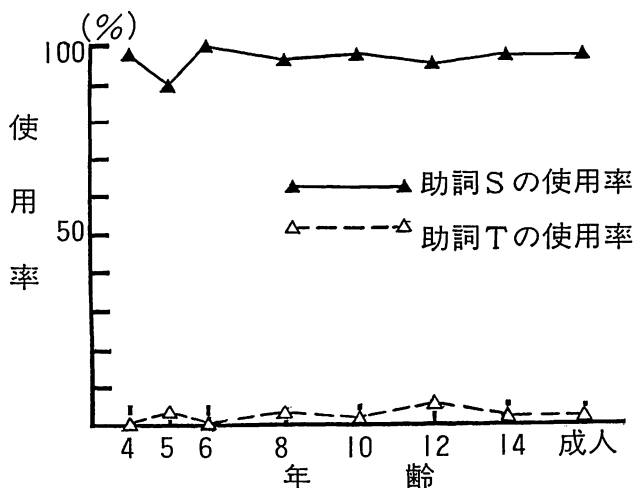


Fig. 3 初出の被指示物の言及に使用された助詞 S, T の各年齢群における使用率の平均。(S: -i/ga, T: -eun/neun)

4 枚目の絵カード ((c), (d)) では既出のものとなっている。

Fig. 3 は初出の被指示物を, Fig. 4 は既出の被指示物を言及するときの助詞 -eun/neun (以下, topic marker の頭文字をとって T と略記) と -i/ga (以下, subject marker を S と略) の使用率を示したものである。被指示物を言及する際, T と S 以外の助詞は用いられなかった。Fig. 3 より, 初出の被指示物を言及するのに使用される助詞は, 5 歳群を除くと S の選択率が 95.0% 以上であった。5 歳群が 90.0% と他の群と比べて若干低いのは助詞の省略が見られたためであり, 5 歳群の助詞の省略率は 6.7% であった。このような省略は 4 歳群においても 1.7% の省略率が認められたが, 4, 5 歳群以外の年齢群では見いだされなかった。このような助詞の省略率の低さは田原・伊藤 (1985) の結果と共

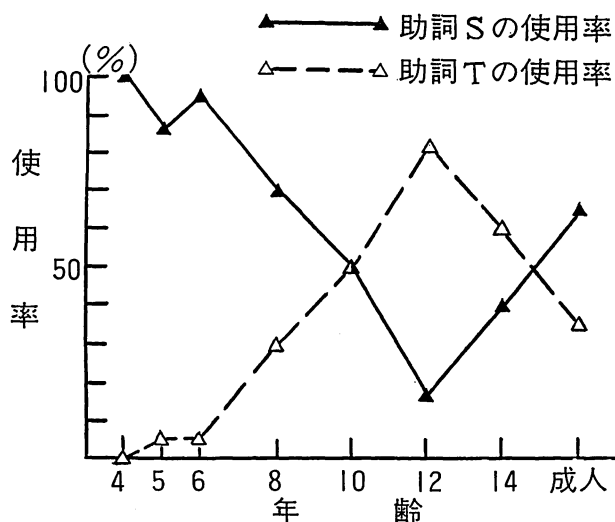


Fig. 4 既出の被指示物の言及に使用された助詞 S, T の各年齢群における使用率の平均。(S: -i/ga, T: -eun/neun)

通したものであった。初出の被指示物に対して T はほとんど使用されず、いずれの群も 5.0% 以下であった。

これに対して、Fig. 4 が示す既出の被指示物を言及するのに使用される T, S の分布には、年齢間で差異が見られる。そこで、既出の被指示物に対する T の使用率に関する年齢的傾向を明らかにするために、以下の分析を行った。まず、既出の被指示物の言及に使用される T の使用頻度に関して、全年齢群で 1 要因の分散分析を行うと、年齢の主効果が有意であった ($F(7, 72) = 11.05$, $p < .001$)。そこで、既出の被指示物に対する各年齢群での T の使用数の平均値の差、すなわち、各年齢群での被験者 1 人当りの T の使用数の差が有意である

韓国語の主題助詞 -eun/neun・主格助詞 -i/ga の談話機能の発達

Table 1 各被験者群の (c) (d) の絵カードに対する
主題助詞の出現回数の平均値の差

	5歳	6歳	8歳	10歳	12歳	14歳	大人
4歳	0.3 ^{n.s.}	0.4 ^{n.s.}	1.8	3.0**	5.0**	3.6**	2.1
5歳	—	0.1 ^{n.s.}	1.4 ^{n.s.}	2.6**	4.6**	3.2**	1.7
6歳		—	1.5 ^{n.s.}	2.7**	4.7**	3.3**	1.8
8歳			—	1.2 ^{n.s.}	3.2**	1.8	0.3 ^{n.s.}
10歳				—	2.0	0.6 ^{n.s.}	0.9 ^{n.s.}
12歳					—	1.4 ^{n.s.}	2.9**
14歳						—	1.5 ^{n.s.}

^{n.s.} Fisher法・Tukey法ともに有意でない

** Fisher法・Tukey法ともに有意 (p<.05)

無印 Fisher法では有意であるが, Tukey法では有意でない

かどうかを Tukey 法と Fisher 法で算出し, Table 1 の結果を得た。Keppel (1982) によれば両テストで有意あるいは有意でない場合には統計的に判断を下せるが, 一方のテストのみ有意な場合には判断を保留すべきであるとしている。この考え方に従って Table 1 の平均値の差を見ると, 10歳群は4~6歳群よりも, 12歳群は4~8歳群および大人よりも, また, 14歳群は4~6歳群よりも有意に使用率が高い。しかし, 4歳群と5・6歳群, 5歳群と6・8歳群, 6歳群と8歳群, 8歳群と10歳・大人群, 10歳群と14歳・大人群, 12歳群と14歳群, 14歳群と大人群との間には有意な差はなかった。

田原・伊藤 (1985) は, 日本語の実験で, 先行文脈に基づいて物語を伝達する課題におけるハとガの使い分けの発達段階として, 談話機能に基づいてハとガを使い分けずガを主に用いる未獲得期 (就学前の幼児), ハとガの使い分けが進む獲得期 (6~12歳), 談話機能に基づいてハとガを使い分ける完成期 (14歳以降) の3つの段階を見いだした。本研究の結果は -eun/neun と -i/ga の使い分けにもこれら3つの段階が存在するということを示唆している。すなわち, 韓国語においては, 談話機能に基づいて -eun/neun と -i/ga を使い分け

ず *-i/ga* を主に用いる未獲得期が4~6歳であり、両助詞の使い分けの進む獲得期が8~10歳、そして、完成期が12歳頃であり、この頃、Tの使用が最も高くなった。しかし、韓国語母語話者においては14歳と大人で両助詞の使い分けの割合が減少した。この結果は、この時期においてハの使用が圧倒的である日本語のそれとは対照的である。

このことは、14歳以降の高年齢群、特に大人では先行文脈に基づいて物語を伝達する場合に、主題助詞と主格助詞を使い分けられているということを証明する結果は得られなかったことを意味している。しかし、このような結果が現れたのは本実験では実験条件が低年齢向きであり、14歳以降の被験者の場合ぬいぐるみの人形に話しかけることへの恥ずかしさや幼児・児童向けの実験に取り組むことへの抵抗感などの理由により物語を伝達するという実験上の前提が崩れ、単に眼前の事実をそのまま表現したために3, 4枚目の絵カードに対して主格助詞の使用が多くなったのかもしれない。松村(1957)は、日本語の主格助詞の用法の一つとして「事実の叙述用法」をあげている。この事実の叙述用法とは眼前の事実をそのまま表現する場合、ハではなく主格助詞ガを用いるとするものである。話し手が物語を伝達するというのではなく報告者的な態度をとって目の前の事実を述べる場合、この主格助詞ガが多用されることが予想される。事実の叙述用法は、韓国語においても同様であると思われる。この推論が正しいかどうかを明らかにするため、物語を伝達するという本実験と類似の課題で、主題助詞と主格助詞を使い分けられているのかどうかを、恥ずかしさや実験に対する抵抗感が出ないような条件のもとで、再度、調査する必要がある。

Table 2 は (a), (b), (c), (d) の4枚の絵カードの被指示物にそれぞれ言及して物語をつくる際、どのような助詞を用いたかを示したものである。(a), (b) の絵カードの被指示物を言及するのにSを、(c), (d) を言及するのにTを使用したとすれば、(a), (b), (c), (d) の順に“SSTT”パターンとなる。Table 2 より、4~6歳では被指示物が初出、既出にかかわらず主にSを用い、

韓国語の主題助詞 -eun/neun・主格助詞 -i/ga の談話機能の発達

Table 2 助詞の使用パターン

a b c d	4	5	6	8	10	12	14	大人 (年齢)
SSSS	29	21	28	19	11	3	7	15
SSST		2	1	4	5	3	8	8
SSTS					2	1	1	1
SSTT		1	1	5	11	21	13	5
TTSS		1						
STST					1		1	
STTT				2		2		1
その他	1	5						
合計	30	30	30	30	30	30	30	30

T: -eun/neun, S: -i/ga

“SSSS” パターンが大多数を占めている。これに対して、12～14 歳群では被指示物の初出、既出の弁別に基づく“SSTT”パターンの割合が増加している。この“SSTT”パターンは5歳群で出現し12歳群まで増加するが、14歳群以降では減少する。また、5歳～大人群には“SSST”のパターンもあり、特に大人では“SSST”パターンの数が“SSTT”のそれを上回っている。この他にも、“SSTS”、“STST”、“STTT”などのパターンがあったが、その数はわずかであった。

ここで注目すべきパターンは“SSST”である。なぜならこのパターンは既出の被指示物が二つあるのに、そのうち最初の既出の動物((c)の絵カードの行為主)には-eun/neunを用いないというものである。しかも、このパターンは5歳以降に見られ、特に大人では“SSSS”パターンを除き最も多いパターンとなっている。この結果は、主題助詞-eun/neun、主格助詞-i/gaがそれぞれ既出、初出の標識ではないことを示している。しかし、同時に、8歳以降は大人を除き“SSST”よりも“SSTT”のパターンの方が多いことから、既出の被指示物に対しては主題助詞を用いる傾向が高いことも否定できない。このSSSTの出現の説明として、田原・伊藤(1985)は「主題助詞の対照的用法」、

「登場動物間の関係の初出・既出」, 「新—旧情報」の3つを検討しているので、本論文でもそれらに照らして検討してみよう。

まず第1の主題助詞の対照的用法による説明とは、4枚目の動物の言及に対照的な意味を込めて主題助詞 *-eun/neun* を用いたとするものである。主題の対照用法とは、2つ以上のものを対照・比較するとき用いるもので、「太郎ハ社会人であるのに対して、次郎ハ学生だ」の主題助詞ハがその例としてあげられる。一般に、主題助詞を対照的用法で用いるときは「Aハ…であるのに対して、Bハ…である」または、「Aガ…であるのに対して、Bハ…である」という形式で用い、「Aハ…であるのに対して、Bガ…である」という形式では不自然となる場合が多い。第1の説明は、「Aガ…であるのに対して、Bハ…である」という対照的意味の込められた形式の文を、「Aガ…である。Bハ…である」という2文に分けてそれぞれ3枚目、4枚目で用いた結果、3枚目でS、4枚目でTが使用されたというものである。

第2は、登場動物間の関係に基づく説明である。本課題では、3、4枚目の動物は既出となっており、2匹の動物の間で何らかの関係が生じるという点では初出である。従って、3枚目の動物には動物間の関係が初出という意味で主格助詞 *-i/ga* が、4枚目では動物が関係し合ったことについて3枚目ですでに既出となっているので主題助詞 *-eun/neun* が用いられたと考える。この説明は“初出＝新情報”かつ“既出＝旧情報”という考え方を前提とするものである。しかし、2枚目と3枚目の絵カードの間には、“方法”で述べたように「…が…を見つけました」という実験者によるナレーションが入っているので、3枚目の絵カードの動物の関係は、このナレーションによって“既出化”されているという反論も成り立ち、この意味で第2の説明では不十分であろう。

第3の説明は、田原・伊藤(1985)が定義した“新—旧情報”の概念と“初出—既出”の概念との差異と共通点に基づく説明である。“初出—既出”とは先行する発話の中にこれから言及しようとする事物があるか否かで、あった場

韓国語の主題助詞 -eun/neun・主格助詞 -i/ga の談話機能の発達

合には既出, ない場合には初出になるのに対して, “新・旧情報”とはこれから言及しようとする事物が聞き手の意識にすでに導入されていると話し手に仮定されているか否かで, 話し手が導入されていると仮定していれば旧情報, 仮定していなければ新情報になる。従って, 既出の情報がより旧情報として扱われやすいという共起関係があることは否定できないが, これから言及しようとする事物が既出であっても, 話し手がまだその事物が聞き手の意識に導入されていないと仮定すれば新情報になる。第3の説明は, 被験者が3枚目の絵カードの既出の被指示物を新情報として扱った結果, “SSST” パターンの反応が出現したと考えるものである。

Table 2の結果は, 談話機能に基づく主題助詞 -eun/neun と主格助詞 -i/ga の使い分けの完成期(12歳頃)の韓国語母語話者が, 既出のものに主題助詞 -eun/neun を, 初出のものに主格助詞 -i/ga を使用する傾向があることを否定するものではない。すなわち, 韓国人母語話者の主題助詞 -eun/neun と主格助詞 -i/ga の語用論的機能に基づく使い分けは, 既出・初出といった先行文脈に影響される。しかし, 同時に, “SSST” パターンが12歳以降の各年齢群にかなりの割合で出現し既出のものに主題助詞, 初出のものに主格助詞が一義的には使用されないということから, 先行文脈のみでは主題助詞と主格助詞の使い分けを決定する要因として不十分であることも明らかとなった。

“SSST” パターンを用いた被験者が3, 4枚目の絵カードの動物を対照・比較する意味で3枚目に主格助詞, 4枚目に主題助詞を用いたのでないとすると, 日本語の主題助詞ハと主格助詞ガはそれぞれ既出・初出ではなく旧・新情報の標識であるという田原・伊藤(1985)の指摘が, 韓国語においても確認されたということを示している。日・韓両言語は, 助詞ハ・-eun/neun が主題の提示および対照機能を, 助詞ガ・-i/ga が主格標識および排他的機能をそれぞれ併せ持つという点で統語・文法的に共通性があるとともに, それら両標識の統語・文法規則に基づく使い分けといった運用の上でも共通性が指摘されてい

る(田原・朴・伊藤, 1987)。本研究ではさらに、語用論上でも主題助詞と主格助詞の使い分けが両言語で共通しているということを示唆している。韓国の学校教育では *-eun/neun* を補助詞, *-i/ga* を格助詞(成均館大学校大同文化研究院, 1985), 日本の学校教育ではハを係助詞(または副助詞), ガを格助詞として用語の上で分離しているが、教育場面では主題助詞と主格助詞を「主語」の助詞というあいまいなかたちでひとまとめにして教えている。しかし、本研究および田原ら(1987)の研究から明らかのように、主題助詞と主格助詞は全く異なる機能を持ち、また言語運用の上でも両助詞は使い分けられているのが明白であり、日・韓の国語・国文法教育において、主題助詞と主格助詞を「主語」などという不明瞭な概念で一括してくるのではなく、主題助詞と主格助詞本来の機能にしたがって教授すべきであろう。

本研究は、まず第1に、韓国語の語用論的機能に基づく主格助詞と主題助詞の使い分けの発達を田原・伊藤(1985)による日本語のそれと比較してみると、日・韓両言語で主題助詞と主格助詞の使い分けの発達において類似性が認められることが明らかとなった。すなわち、日・韓両言語において、就学期前～就学期は語用論的機能に基づいて主題助詞と主格助詞を使い分けられることのできない未獲得期であり、小学校の時期が獲得期、そして中学校以降に完成期を迎えるという3つ段階を見いだすことができる。このことは、日・韓両言語において、語用論に基づく主題助詞と主格助詞の使い分けができるようになる時期がほぼ同時期であるとともに、使い分けの獲得の時期が極めて遅いということを示すものである。主題助詞と主格助詞の獲得が遅れる要因としては、岩立・稲葉(1987)が指摘している課題・実験条件による要因、田原・伊藤(1987)が指摘しているように、主題助詞と主格助詞は様々な機能を併せ持ち、主題・主格の標識の表層形式と機能が1対1対応しないという点、省略可能で語順や意味などの手がかりと比較して相対的な強さに欠けるといった要因が考えられる。

田原・伊藤(1985)の日本語母語話者の場合、本実験と同様の課題において、

韓国語の主題助詞 -eun/neun・主格助詞 -i/ga の談話機能の発達

14歳群と大人群は主題助詞と主格助詞を新旧情報に基づいて使い分けていた。これに対して、本研究では、14歳群と大人群において主題助詞と主格助詞を使い分けていることを証明する結果がえられなかった。韓国語成人母語話者が本当に、主題助詞と主格助詞を使い分けていないのかどうかは今後の調査を待つ必要がある。とはいえ、このような使い分けの能力がいったん獲得された後に再び消失することは考え難い。事実、本論文の著者の一人である韓国語成人母語話者の言語的直感によれば、先行文脈に基づいて物語を伝達するという本課題のような場面では主題助詞と主格助詞は使い分けられるとしている。今後、再調査がおこなわれ、この指摘が正しいとすれば、こういった違いを生み出す原因として、日・韓両国での実験にのぞむ被験者の態度・意識に対する文化的な差異が考えられよう。談話機能に基づく主題助詞と主格助詞の使い分けは、聞き手がどのような情報を持っていると話し手が判断しているかという要因に大きく依存していると考えられるのだが、実験に対する恥ずかしさや抵抗感があれば、発話者は場面、想定する聞き手に対する認識が異なってくることが予想される。

本研究は、談話機能に基づく韓国語の主題助詞と主格助詞が既出・初出ではなく、新旧情報に基づいて使い分けられていることを示唆するものである。このことは韓国語のみならず日本語にも見いだされており、この点で談話機能における日・韓両言語の主題と主格の用法の共通性が指摘された。両言語の類似性は統語的機能だけでなく、談話機能においても成立しているといえる。さらに、発達においても、両言語話者は主題助詞と主格助詞の使い分けで類似した獲得過程をたどることが明らかとなった。

本研究に引き続き、われわれは別のかたちで日韓両言語の新旧情報に基づく主題助詞・主格助詞の使い分けの実験を大人の被験者に行なっている。その予備的な結果は田原・朴・伊藤(1988)に報告されており、大人が新旧情報に基づいて -eun/neun と -i/ga を使い分けていることの証明に成功している。こ

の場合の韓国語成人母語話者の主題・主格助詞の使い分けのパターンをみると、先行文脈すなわち既出・未出の影響を受けているが、新旧情報に基づいていると言えそうである。この結果は日本人の反応と共通している。

引用文献

- 天野清 1985 子どもの文法獲得の過程, 言語生活, 1985(9), 66-72. 筑摩書房。
- Bates, E., & MacWhinney, B. 1979 A functionalist approach to the acquisition of grammar. In E. Ochs & B. Schieffelin (Eds.), *Developmental pragmatics*. Academic Press.
- Clancy, P.M. 1986 The acquisition of subjects in Korean. (Unpublished.)
- Greenfield, P.M. 1979 Informativeness, presupposition, and semantics choice in single-word utterances. In E. Ochs & B. Schieffelin (Eds.), *Developmental pragmatics*. Academic Press.
- 林部英雄 1983 文における新・旧情報の弁別に関する発達的研究, 心理学研究, 54, 135-138.
- 洪思満 (Hong, Sa-man) 1983 国語特殊助詞論, 学文社: 大邱 (韓国語)。
- 岩立志津夫・稲葉礼子 1987 就学前児における助詞ハとガの獲得: 新旧情報との関連において, 教育心理学研究, 35, 241-246.
- Keppel, G. 1982 *Design & analysis: A researcher's handbook*. 2nd ed. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall.
- 近藤一政 1978 助詞ガとハの使い分けの発達, 東京大学教育心理学科卒業論文。(未公刊)
- 久野暉 1973 日本文法研究, 大修館書店。
- Li, C.N. and Thompson, S.A. 1976 Subject and topic: a new typology of language. In C.N. Li (Ed.), *Subject and topic*. Academic Press.
- 前田紀代子 1977 乳幼児の言語発達に関する調査研究 (Ⅳ), 日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 362-363.
- 松村明 1957 江戸語東京語の研究, 東京堂出版。
- 宮原英種・宮原和子 1976 Language development in a young Japanese child: Mainly on the acquisition of particles. 福岡教育大学紀要 (教職科編), 26, 91-97.
- 宮原和子・宮原英種 1973 幼児における文法発達の諸相, 日本心理学会第37回大会発表論文集, 698-699.
- 大久保愛 1967 幼児言語の発達, 東京堂。
- 成均館大学校大同文化研究院 (編) 1985 高等学校文法, ソウル: 文教部 (韓国語)。
- 田原俊司・伊藤武彦 1985 助詞ハとガの談話機能の発達, 心理学研究, 56, 208-214.

韓国語の主題助詞 -eun/neun・主格助詞 -i/gaの談話機能の発達

- 田原俊司・朴 媛淑・伊藤武彦 1987 韓国語単文理解における主題助詞と主格助詞の動作主性とその発達：日本語の助詞ハとガとの比較, 教育心理学研究, 35, 213-222.
- 田原俊司・伊藤武彦・朴 媛淑 1988 日・韓両言語において主題助詞と主格助詞は先行文脈に基づいて使い分けられているか, 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 92-93.
- Tak, Hei-Seong. 1982! A study on the syntactic structure concerned with the subject in Korean. 忠北大学修士論文。(未公刊)(韓国語)
- 趙明翰 (Zoh, Myeong-Han) 1984 韓国児童における言語獲得研究：策略模型 ソウル大学出版部。(韓国語)